明治大学人文科学研究所紀要　第85冊　（2019年３月31日）153-171

米国大学のフラタニティとソロリティの家庭環境と入会動機に関する一考察

天　木　勇　樹

How Much Do Parental Educational Level and Parental Involvement Influence the Decision to Join Fraternities and Sororities in the American Higher Education System?

AMAKI Yuki

Fraternities and sororities are not common in Japanese universities. Since the 18th century, the fraternity and sorority system has been a part of the American higher education system. A fraternity is for male students, and a sorority is for female students. The purpose of this survey is to explore how socio-economic status (SES) differences externally and internally influence college students to join fraternities and sororities and to spend their campus life. SES has a significant influence, and the main indicators of SES are parents' annual income, their highest level of education, their occupations, and their involvement in early childhood education. An additional aim is to get clear picture of how Japanese universities should cultivate future global leaders, in analyzing the role of fraternities and sororities who have strong leadership skills and social communication skills.

The target population for this study is current fraternity and sorority members at public or private universities. In this study, 437 fraternities and sororities (132 male students and 264 female students) responded to an online survey. Because of the restrictions on personal questions by fraternity and sorority members, I divided these participants into 4 groups (from G1 to G4) by using the two indicators (parents' highest level of their formal education and their involvement in early childhood education). Where parental education levels and their involvement in early childhood education were higher, they were classified as belonging to Group 1. Where their education levels and their involvement were lower, their group was classified as belonging to Group 4. Fraternities and sororities in G3 and G4 were first-generation college students whose parents' highest level of education is a high school diploma or less.

This study finds that approximately 80% of fraternities and sororities in G1 and G2 decided to join the fraternity and sorority because they have leadership opportunities that strengthen their resumes, but 55% of fraternities and sororities in G4 did not think of it. Also, most fraternities and sororities in G1 and G2 participated in more organized social events every weekend, compared with fraternities and sororities in G3 and G4. Most fraternities and sororities in G4 are not interested in developing their leadership skills and social skills. This study shows that SES differences have influenced their motivation to spend their campus life.

I believe longitudinal research about campus life between the fraternity/sorority members and non-fraternity/sorority members is needed to explore how SES differences influence their campus life and how they develop their leadership skills and social skills, considering in the main indicators of SES.

<Key words> college life, fraternity, sorority, parents' involvement, American higher education

《公募論文》

米国大学のフラタニティとソロリティの家庭環境と入会動機に関する一考察

天　木　勇　樹

1　はじめに

1.1　研究の背景

米国の大学に存在するフラタニティ（Fraternity）とソロリティ（Sorority）という学生組織は，日本の高等教育機関では聞き慣れない組織であるが，米国の大学では18世紀後半から高等教育と強く結び付く学生主体の社交組織である。フラタニティは男子学生のみで構成され，ソロリティは女子学生のみで構成された組織である。全米の大学ランキングを毎年発行するU.S. News & World Reportの各大学の紹介欄には，学生の何割がフラタニティやソロリティに所属しているのかを示す項目があり，高等教育との結び付きが強いことが伺える。一方，コミュニティ・カレッジ（公立2年制大学）には，フラタニティやソロリティのような学生組織は存在せず，4年制大学の特徴の一つであるといえる。フラタニティやソロリティは，社会貢献や地域奉仕などを活動理念とし，チャリティイベント参加やボランティア活動などの課外活動を頻繁に行う学生組織である。学生時代にフラタニティやソロリティに所属した著名人は多く，1877年以降，ロナルド・レーガン元米国大統領やビル・クリントン元米国大統領等の歴代18人の米国大統領がフラタニティの出身者であることが知られている。米国初の女性の国務長官を務めたマデレーン・オルブライトやヒラリー・クリントン元米国国務長官も学生時代はソロリティのメンバーであった。米国の上院議員や下院議員の76%，連邦最高裁判所判事の85%が，学生時代にフラタニティやソロリティに所属していたというデータがある（Konnikova, 2014）。このようにフラタニティやソロリティとしての活動を通じ，リーダーシップの素養を身に付け，様々な分野で活躍している。

本稿では，日本では実証研究が少ないフラタニティやソロリティに所属する学生の入会動機や学生生活について分析し，米国の大学生がフラタニティやソロリティという学生組織に何を求めて入会し，どのような学生生活を送っているのかについて調査する。さらに，親の学歴や教育意識の違いから見るフラタニティやソロリティへの入会動機や学生生活の相違についての分析を行なっている。

1.2　フラタニティとソロリティについて

フラタニティやソロリティは，1820年代から米国国内の各大学に広がり，全米の約630校に約2,913団体が存在する。全米の学部生の約750,000人がフラタニティやソロリティに所属し学生生活を送っている。社会貢献，地域奉仕，人材育成と人脈形成を理念として掲げ，各団体がそれぞれの規則のもとで活動している。各団体の支部が全米の大学にあり，各団体名は2文字または3文字のギリシャ文字で表記される。具体例を挙げると，フラタニティのアルファ・エプシロン・パイ団体（Alpha Epsilon Pi）は「ΑΕΠ」，アルファ・ガンマ・オメガ団体（Alpha Gamma Omega）は「ΔΓΩ」と表記され，ソロリティのカッパ・アルファ・シータ団体（Kappa Alpha Theta）は「ΚΑΘ」，カイ・オメガ団体（Chi Omega）は「ΧΩ」などと表記される。学生は，キャンパス内で2文字または3文字のギリシャ文字が付いた特注のTシャツやトレーナーを着用し，メンバーが共同生活を送る建物の外壁には各団体のギリシャ文字が表札として掲げられるなど，各団体のメンバー同士の結束力を強める取り組みを行なっている。

フラタニティやソロリティに入会した学生は，キャンパスに隣接するフラタニティ・ハウス（Fraternity House）やソロリティ・ハウス（Sorority House）と言われる一軒家で数十名が共同生活を送る。共同生活を通じ，普通の学生生活では学ぶ機会の少ない先輩や後輩間の縦の繋がり，協調性や礼儀などを学ぶ。また，健康的な食事管理のために，専属の調理師を雇う団体もある。

各団体には代表，副代表，経理担当，議事録担当などの役割がある。入会や入居希望者の選考，チャリティイベントやボランティア活動等の企画運営，住居の修理費用の予算の執行などについての会議は，ロバート・ルール（Robert's Rules of Order）の4つの権利（多数派の意見を優先する権利；少数意見を尊重する権利；個人攻撃を認めずプライバシーを擁護する権利；欠席者の権利を守る権利）を基本的な原則として進められている。

また，フラタニティやソロリティの会員になるためには，いくつかの入会審査を受ける必要がある。新学期が始まる8月下旬から9月頃に1週間程度の勧誘期間（Rush Week）があり，大学に隣接する各フラタニティ・ハウスやソロリティ・ハウスが全ての学生に開放され，入会に興味がある学生を対象に説明会や食事会が行なわれる。入会に興味がない学生も参加可能であるため，フラタニティやソロリティ主催の新入生歓迎会のようなイベントが勧誘期間の間，毎晩のように開催される。その後，2ヶ月から3ヶ月間の誓約期間（Pledge Period）があり，その期間にフラタニティやソロリティに興味がある新入生は希望する団体で入会のための適正試験を受ける。試験内容は，入会を希望する団体の設立の歴史や活動理念の理解度，入会を希望する団体に所属する先輩の氏名や出身地をどの程度覚えているのか，各団体の歌の暗唱力等が測られる。さらに，入会希望者は，希望する団体出身の社会人と共に週末に行なわれるボランティア活動やチャリティイベントに参加し，共同生活を送る上で必要なコミュニケーション能力や協調性の有無などが測られる。全ての適正審査終了後，正式なメンバーとして入会が認められた者は，フラタニティでは互いに「兄弟（brother）」，ソロリティでは互いに「姉妹（sister）」と呼び合い，フラタニティやソロリティとしての学生生活が始まる。

1.3　文献研究

1.3.1　社会性やリーダーシップ等の素養を身につける場としての役割

フラタニティとソロリティに所属していない学生に比べ，違法ドラッグの使用率やアルコールの摂取率が高い等の否定的なイメージがある一方で（Capone, Wood, Borsai, & Laird, 2007），フラタニティやソロリティの学生は，ボランティア活動やチャリティイベントなどの社会奉仕活動に積極的に参加する傾向が強いという調査結果がある（Asel, Seifert, & Pascarella, 2009; Hayek, Carini, O'Day, & Kuh, 2002; Whipple & Sullivan, 1998）。Asel, Seifert, & Pascarella（2009）が行ったフラタニティやソロリティに所属する学生と所属していない学生を対象に学生生活に関する調査の結果，コミュニティサービスやボランティアなどの課外活動への参加時間は，フラタニティやソロリティに所属していない学生に比べ，数十時間以上多いことが示された。フラタニティやソロリティの学生は，様々な課外活動を通じ，社会人とのコミュニケーション方法や接し方などを学んでいる。

また，その他の先行調査によると，フラタニティやソロリティとしての学生生活を通じ，リーダーシップ力や問題解決力を習得することができるという調査結果がある（Brikenbolz & Schumacher, 1994; Harms, Woods, Roberts, Bureau, & Green, 2006; Martin, Hevel, & Pascarella, 2012）。具体的な活動として，フラタニティやソロリティの学生は，大学の学生委員会の役員としての活動や，学内スポーツ部への参加，コミュニティサービス団体での活動などに積極的に参加している。フラタニティやソロリティの学生は，リーダーシップを必要とする責任のある役割に就き，互いにロールモデルとして活躍することにより，リーダーシップに必要な素養を身に付けていることが考えられる。このように課外活動や社会貢献活動への参加を通じ，将来必要とされるリーダーシップ力を習得している。その経験を活かし，政府機関や民間企業・団体のトップとして活躍している。

1.3.2　フラタニティやソロリティに所属していない学生との比較（学業成績や学業継続率）

先行研究では，フラタニティやソロリティに所属する学生と所属していない学生の学業成績や学業継続率に関する調査が行なわれている。Nelson, Halperin, Wasserman, Smith, & Graham（2006）が行なった学業成績に関する調査では，フラタニティとソロリティに所属する学生と所属していない学生を対象に学部1年次と学部4年次に進級した際のGPA（grade point average）の変化を分析した。その結果，1年次ではフラタニティやソロリティに所属する学生のGPAの平均が高かったが，学年が上がる毎に徐々にGPAの平均は，フラタニティやソロリティに所属していない学生と同じになる結果が示された。高いGPAを維持するための学業に対する姿勢は，フラタニティやソロリティに所属しているかどうかに関係ないことが明らかになった（Hevel, Martin, Weeden, & Pascarella, 2015）。

また，フラタニティやソロリティに所属する学生は，フラタニティやソロリティに所属していない学生に比べ，学生生活の満足度や学業継続率（在学率100%から退学率を引いた割合）が高いことが示された（Pennington, Zvonkovic, & Wilson, 1989; Nelson, Halperin, Wasserman, Smith, & Graham, 2006; Hevel, Martin, Weeden, & Pascarella, 2015）。ソロリティに所属する学生では，ソロリティに所

属していない学生の4年次における学業継続率は67％であるのに対し，ソロリティに所属する学生の4年次の学業継続率は93％と高い値を示している。フラタニティの学生も同様であり，フラタニティに所属していない学生の4年次の学業継続率が73％に対し，フラタニティの学生では93％とほとんどの学生が退学せずに卒業していることが示された。フラタニティやソロリティの学生の中途退学率は，学年が上がる毎に大幅に低くなる傾向があり，学生生活を通じ，先輩と後輩の上下関係の中から互いに強い絆を育み，互いに助け合う環境があるからこそ，高い学業継続率を維持することができる。

1.4　研究の目的

先行研究では，過度な飲酒などによる新入生に対するしごきやフラタニティやソロリティの仲間からの圧力から生じる様々な学生同士のトラブルなど，フラタニティやソロリティに対するマイナスのイメージも多く挙げられ（Asel, Seifert, & Pascarella, 2009; Wechsler, Kuh, & Davenport, 1996; Wechsler, 1996; Wechsler, Dowdall, Maenner, Gledhill-Hoyt, & Lee, 1998），それがフラタニティやソロリティへの入会を敬遠する理由として挙げられていることがある。さらに，フラタニティやソロリティに所属していない学生と比較した場合，アルコールの摂取率が高い等の否定的な側面が強調される学生組織ではあるが，フラタニティやソロリティに所属する学生は，どのようなことに期待を持ち，どのような影響を受けて入会に至ったのかという入会動機についてまだ明らかではない部分が多い。本稿では，現役大学生を対象に，親の学歴と親の教育意識から分類，分析し，どのような家庭環境で育った学生が，どのような影響を受けてフラタニティやソロリティという学生組織に入会するに至ったのかについて分析する。価値観が異なる多様なバックグランドを持った学生が集まるフラタニティやソロリティの学生組織では，地域貢献等の活動を通じ，人的ネットワークの拡大やリーダーとして活躍するための素養を身につけている場として機能していることが推測できる。グローバルリーダーとして活躍する人材を輩出するフラタニティやソロリティの学生が考える入会動機と学生生活について分析することにより，日本ではあまり実証的な検証が行なわれていない米国大学のフラタニティとソロリティの大学文化について考察する。

2　調査概要

2.1　調査方法

本調査では，米国西海岸にあるカリフォルニア州の州立大学3校及び私立大学3校の4年制大学を中心にフラタニティやソロリティに所属する学生に調査協力を依頼し，オンラインによるアンケート調査を実施した。ニューヨーク州やマサチューセッツ州等の北東部の大学にも調査協力を求めたが，調査実施の協力を得ることができなかった。アンケート調査票の質問項目を以下に示す。なお，問1の基本データ以外は，4段階での回答選択（とてもそう思う，ややそう思う，あまりそう思わない，全くそう思わない）を求めた。

【問1】基本データ（性別，在籍大学の種類，親の学歴，幼少期の親子間の本の読み聞かせの頻度，

大学の学業成績，アルバイト勤務時間）

【問2】フラタニティやソロリティへの入会に影響を与えた外的要因（親や友人等）

【問3】フラタニティやソロリティへの入会動機

【問4】フラタニティやソロリティとしての学生生活

問1を聞いた理由としては，家庭環境がフラタニティやソロリティへの入会動機や学生生活にどの程度影響を与えているのかを分析するため，親の学歴と親の教育意識の違いによる分析を行なう。両親が大学卒業以上の学歴を持つか否かについての質問項目と幼少期の親子間の本の読み聞かせの頻度を基本データの中に加えた。親の学歴や教育意識などの家庭環境の要因が進路選択に直接結びついているという先行研究（Bourdieu & Passeron, 1994; Levine & Sussmann, 1960）がある。さらに，浜野（2009）は，親の教育意識は子供の学力と強い関係があり，「階層」⇒「家庭環境・生活」⇒「学力」という影響関係があることを明らかにした。Bourdieu & Passeron（1994）も文化的再生理論の中で，親の学歴（学歴資本）や職業的地位（経済資本）が子供の勉学態度や職業的地位に影響を与えると指摘する。本調査では，人種，宗教，親の職業や所得など，回答者を特定できる可能性が少しでもある質問項目を含む調査実施について，一部のフラタニティやソロリティの学生団体から実施許可が下りなかったため，本調査では人種や親の所得などの質問項目を全て外して実施した。

また，外的要因がフラタニティやソロリティに入会する上でどの程度影響を与えているかを調査するため，問2の設問を設けた。Anderson（1985）によれば，親，友人，教師，進路指導カウンセラー，生活環境などの外的要因が大学進学を決める際に，生徒自身の内的要因と同様に大きな影響を与えるという。フラタニティやソロリティに入会する際に，そのような外的要因がどの程度影響しているのかについて調べる。

問3では，フラタニティやソロリティへの入会動機に関する4つの入会動機を聞き，問4ではフラタニティやソロリティとしての学生生活に関する6つの質問について回答を求めた。問3と問4の質問項目の選定については，著者がフラタニティやソロリティを対象に行ったパイロット調査の中で入会動機や学生生活に関する回答を求め，調査協力者から挙げられた入会動機や活動内容等を本調査の際に選択肢として使用した。

3　調査結果

3.1　回答者の概要

本調査での有効回答数は，全体で437件であった。フラタニティに所属する学生の有効回答数の割合は全体の34.1%，ソロリティに所属する学生の割合は全体の65.9%である。有効回答数437件のうち，州立大学に在籍する学生は396人（内訳：フラタニティ132人，ソロリティ264人），私立大学に在籍する学生は41人（内訳：フラタニティ17人，ソロリティ24人）である。結果的に州立大学の学生が多くなったが，意図的に対象を絞ったものではない。私立大学に在籍する回答者の中には，自費で授業料を支払っている学生と授業料免除等の奨学金を受給し在籍している学生がいることが考えら

れるが，本調査では奨学金受給の有無の項目を設けていなかったため，私立大学と州立大学の回答者を混在し分析を行なった。

両親の学歴についての質問項目では，フラタニティの85.2％は両親又は親のいずれかが大学卒業以上の学歴を持っていると回答し，ソロリティでは84.3％であった。大学卒業以上の学歴を持たない両親のもとで育った学生は，それぞれ約14％にとどまった。また，幼少期の親子間の本の読み聞かせの頻度についての質問項目では，「よく読み聞かせをしてもらった」と回答したフラタニティは51.7%，「時々読み聞かせをしてもらった」は33.6％である。ソロリティでは，70.4％が「よく読み聞かせしてもらった」と回答し，17.8％が「時々読み聞かせをしてもらった」と回答している。Dwyer & Hecht（1992）の調査結果によると，一般的に，幼少期の本の読み聞かせ等の親の教育意識が子供の学業成績に影響を与えている。さらに，親の学歴や所得等を加味した社会経済的地位（socio-economic status: SES）の低い層の子供はSESの高い層の子供に比べ，教育意識が低いため，学力も下がるという調査結果がある。本調査の結果，フラタニティやソロリティの多くが，親の学歴が高く，親の教育意識が高い家庭環境の中で育った学生が多いことがわかった。

5段階（0～4）の数値の学業成績（GPA）については，GPA3.5以上，GPA3.0以上3.5未満，GPA2.5以上3.0未満，GPA2.0以上2.5未満の成績の中で，GPA3.0以上3.5未満であると回答した学生がフラタニティやソロリティ共に8割を占めた。また，一週間の平均アルバイト時間に関する質問項目では，フラタニティとソロリティ共に4割の学生がアルバイトはしておらず，週に10時間以上のアルバイトを行なっている学生はフラタニティでは28.9％，ソロリティでは23.6％に留まった。また，米国連邦政府教育省（2016）による大学生のアルバイト時間に関する調査によると，正規学生のうち，14％が週に20時間未満，19％が週に20時間以上35時間未満，7％が週に35時間以上のアルバイトを行なっている。

以上のことから，フラタニティやソロリティに所属する学生は，全米の大学生のアルバイト時間の平均と比べ，親からの経済的な援助が受けられる学生，又は，成績が良く，生活費を含む奨学金を受給している優秀な学生であることが推測できる。

3.2　フラタニティやソロリティへの入会に影響を与えた外的要因

フラタニティやソロリティへの入会を決める際に，親や友人，高校教師等の外的要因が学生の入会への意思決定にどの程度影響があったのかについて本調査を通じて分析した結果が以下の通りである。父親や母親の助言が大学進学を決める上で子供に強い影響を与えるという先行研究（Anderson, 1985）があることから，学生がフラタニティやソロリティに入会を決める際に父親や母親の影響をどの程度受けたのかという質問項目を設けた。父親の影響に関する質問項目に対し，「とてもそう思う」，「ややそう思う」と回答したフラタニティの学生は合計17.9%，ソロリティの学生は合計23.2％であった。母親の影響に対し，「とてもそう思う」，「ややそう思う」と回答したフラタニティの学生は合計15.1%，ソロリティの学生は合計32.3％であった。フラタニティの学生に比べ，ソロリティの学生は母親からの影響を受け，入会を決めた学生がわずかに多いことが示された。

兄弟や高校教師からの影響に関しては，学生が入会を決める際にほとんど影響を受けてないことが

わかった。一方で，友人の影響については，「とてもそう思う」，「ややそう思う」と回答したフラタニティの学生では合計73.4%，ソロリティの学生では合計74.6%であった。米国の大学では大学1年生の多くがキャンパス内の学生寮で共同生活を送るため，大学入学後にルームメイトや友人との情報交流の中からフラタニティやソロリティへの入会を決める学生が多いことが推測できる。

3.3　親の学歴と教育意識に注目して

フラタニティやソロリティの学生の家庭環境が，社会貢献活動への積極的な参加や社交性にどの程度強い影響を与えるのかを考える。本調査では，親の学歴や幼少期の親子間の本の読み聞かせの頻度のみをアンケート調査に含めたため，調査参加者を親の学歴や職業，所得などから構成される社会経済的地位（SES）の高い層，中間層，低い層の3種類に厳密に分類することができなかった。親の職業や所得の他に，幼少期の本の読み聞かせの頻度や，家庭の本の数，学校外での学習塾や家庭教師等の学習活動の実施状況などもSESの構成要素になる（Sirin, 2005）。本調査では，親の学歴と幼少期の本の読み聞かせの頻度から親の教育意識を判断し，4つのグループに分類した。親の学歴による分類については，両親又は親のいずれかが大学卒業以上の学歴を持っていると回答した学生は，親の学歴が高いグループとし，両親が大学卒業以上の学歴を持っていない学生は，親の学歴が低いグループに分類した。親の教育意識については，幼少期の親子間の本の読み聞かせの頻度から，「よく読み聞かせをしてもらった」，「時々読み聞かせをしてもらった」と回答した学生は，親の教育意識が高いグループとし，「ほとんど読み聞かせをしてもらわなかった」，「全く読み聞かせをしてもらわなかった」と回答した学生は，親の教育意識が低いグループに分類した。以上のことを踏まえ，分類したグループは，以下の4通りである。

G1: 親の学歴が高く，親の教育意識も高い

G2: 親の学歴は高いが，親の教育意識は低い

G3: 親の学歴は低いが，親の教育意識は高い

G4: 親の学歴が低く，親の教育意識も低い

本調査の結果，それぞれのグループの人数の割合を見ると，親の学歴が高く，親の教育意識も高いグループ（以下，G1）のフラタニティは，フラタニティ全体の中で78.4%（116名）を占め，親の学歴は高いが，親の教育意識は低いグループ（以下，G2）は7.4%（11名），親の学歴は低いが，親の教育意識は高いグループ（以下，G3）では6.8%（10名），親の学歴が低く，親の教育意識も低いグループ（以下，G4）では7.4%（11名）であった。ソロリティでは，G1は80.5%（227名），G2は5%（14名），G3は7.8%（22名），G4は6.7%（19名）であった。フラタニティとソロリティそれぞれの8割以上は，親の学歴が高く，親の教育意識も高い家庭環境の中で育った学生であることが示された。

また，フラタニティとソロリティの学業成績に注目した場合，表1の通り，両親，又は親のいずれかが大学卒業以上の学歴を持ち，親の教育意識も高い家庭で育った学生では，学業成績においては高い成績を修めていることがわかる。先行研究では，フラタニティやソロリティに入会していない学生と比べ，学業成績に大きな差がないことが示されたが（Asel, Seifert, & Pascarella, 2009），本調査で

はフラタニティやソロリティに所属していない学生を調査対象に含めなかったため，学業成績の比較については今後の課題としたい。Berger & Archer（2016）の調査では，一般的に，SESの低い層の学生に比べ，SESの高い層の学生は，高い学業成績を修め，明確な将来像を持っていることが明らかになった。このことから，先行研究にもあるように親の学歴や親の教育意識が，大学在籍中のフラタニティやソロリティの学生の学力にも強い影響関係があるといえる。

表１　学業成績

%		GPA 3.5 以上 4.0	GPA 3.0 以上 3.5 未満	GPA 2.5 以上 3.0 未満	わからない
G1	F	33.6	51.8	12.7	1.8
	S	44.6	45.1	3.6	6.7
G2	F	36.4	36.4	18.2	9.1
	S	50.0	28.6	7.1	14.3
G3	F	20.0	70.0	10.0	0
	S	19.0	71.4	4.8	4.8
G4	F	0	63.6	36.4	0
	S	16.7	55.6	27.8	0

※フラタニティをF，ソロリティをSと表記した。

3.4　親の学歴と教育意識の違いから見る学生の入会動機

家庭環境の違いから見る入会動機について，フラタニティとソロリティそれぞれをG1からG4のグループに分けて分析した結果が表2である。表2では，各項目について，学生自身にとってどの程度思うかを「とてもそう思う」を1点，「ややそう思う」を2点，「あまりそう思わない」を3点，「全くそう思わない」を4点とし，項目ごとに平均値と変動係数を算出した。その後，各グループの入会動機についての類似点と相違点を検討した。

「共同生活の中で，互いに支え合う強い絆を作ることができるから入会した」という質問項目では，G4のソロリティ（平均値2.00，変動変数41.00）以外の各グループの平均値は2.0未満であり，平均値が低く，共同生活を通じ強い絆を育むことの重要性を認識している。さらに，「生涯の友人を作ることができるから入会した」という質問項目では，G1のフラタニティの平均値（平均値1.26，変動係数41.27）とソロリティの平均値（平均値1.25，変動係数40.00）が他のグループに比べ一番低く，親の学歴が高く，親の教育意識も高い家庭環境で育った学生の多くは，強い絆で結ばれた友人関係の構築を目的にフラタニティやソロリティに入会していることが示された。同じ入会目的の下でボランティア活動やチャリティイベント等の活動を通じ，フラタニティやソロリティの先輩と後輩が一体となり，強い絆を育んでいることがわかる。

また，米国では，日本において一般的な新卒一括採用の概念がないため，学業成績に加えて，アメリカ人の学生が就職活動を行なう際には，学歴や人脈も重要である。そのため，社会人との幅広い人脈の構築が学生時代から必要となる。フラタニティやソロリティの利点や人脈を利用してより良い仕

事に就くことができるから入会したという質問項目では，G1のフラタニティの平均値（平均値1.99, 変動係数36.18）のみが2.0未満であり，他のグループよりも卒業生とのネットワークの重要性を認識していることが伺える。G1のフラタニティ同様に，他のグループの平均値も低く，フラタニティやソロリティの学生は，大学在学中から将来のための人脈を社会の中で築く重要性を感じている学生も多い。大学入学後の早い段階から将来の就職を見据えた計画を持った学生が，フラタニティやソロリティに積極的に参加する傾向があることが明らかになった。

次に，履歴書で高く評価してもらえるようなリーダーシップを発揮する活動を行なっているからという入会理由では，G3のフラタニティ（平均値1.20, 変動係数35.00）とソロリティ（平均1.29, 変動係数35.66）の平均値が一番低く，他のグループに比べ，G3やG4の平均値が低いことが示された。G3やG4の学生のように親が大学卒業以上の学歴を持たない家庭環境で育った学生が初めて大学に進学した場合，その学生は，大学第一世代の学生（first-generation college student）として扱われ，大学に進学したことに対して自身を誇るべきことであるというアメリカの文化がある（Amaki, 2013）。G3の学生は，家族の中で初めて大学に進学したという自信とより良い仕事に就きたいという高い志を持ち，フラタニティに入会していることが推測できる。

表2　フラタニティやソロリティへの入会動機

入会動機	Group 1							
	フラタニティ				ソロリティ			
	度数	平均値	標準偏差	変動係数	度数	平均値	標準偏差	変動係数
1. 共同生活の中で，互いに支え合う強い絆を作ることができるから	104	1.58	0.76	48.10	207	1.57	0.76	48.41
2. 生涯の友人を作ることができるから	104	1.26	0.52	41.27	208	1.25	0.50	40.00
3. 大学卒業後，フラタニティやソロリティの会員の利点や人脈を利用し，より良い仕事に就くことができるから	102	1.99	0.72	36.18	208	2.05	0.64	31.22
4. 履歴書で高く評価してもらえるようなリーダーシップを発揮する活動を行なっているから	104	1.36	0.57	41.91	209	1.30	0.51	39.23
入会動機	**Group 2**							
	フラタニティ				ソロリティ			
	度数	平均値	標準偏差	変動係数	度数	平均値	標準偏差	変動係数
1. 共同生活の中で，互いに支え合う強い絆を作ることができるから	10	1.90	0.99	52.11	11	1.82	0.98	53.85
2. 生涯の友人を作ることができるから	10	1.60	0.97	60.63	11	1.55	0.69	44.52
3. 大学卒業後，フラタニティやソロリティの会員の利点や人脈を利用し，より良い仕事に就くことができるから	10	2.00	1.05	52.50	11	2.27	0.67	29.52

4. 履歴書で高く評価してもらえるようなリーダーシップを発揮する活動を行なっているから	10	1.60	0.97	60.63	11	1.55	0.69	44.52
入会動機	Group 3							
	フラテニティ				ソロリティ			
	度数	平均値	標準偏差	変動係数	度数	平均値	標準偏差	変動係数
1. 共同生活の中で，互いに支え合う強い絆を作ることができるから	10	1.60	0.70	43.75	21	1.57	0.68	43.31
2. 生涯の友人を作ることができるから	10	1.60	0.70	43.75	21	1.33	0.48	36.09
3. 大学卒業後，フラタニティやソロリティの会員の利点や人脈を利用し，より良い仕事に就くことができるから	10	2.10	0.57	27.14	21	2.19	0.93	42.47
4. 履歴書で高く評価してもらえるようなリーダーシップを発揮する活動を行なっているから	10	1.20	0.42	35.00	21	1.29	0.46	35.66
入会動機	Group 4							
	フラタニティ				ソロリティ			
	度数	平均値	標準偏差	変動係数	度数	平均値	標準偏差	変動係数
1. 共同生活の中で，互いに支え合う強い絆を作ることができるから	9	1.89	0.93	49.21	16	2.00	0.82	41.00
2. 生涯の友人を作ることができるから	9	1.33	0.50	37.59	16	1.44	0.51	35.42
3. 大学卒業後，フラタニティやソロリティの会員の利点や人脈を利用し，より良い仕事に就くことができるから	9	2.33	0.71	30.47	16	2.31	0.70	30.30
4. 履歴書で高く評価してもらえるようなリーダーシップを発揮する活動を行なっているから	9	1.44	0.53	36.81	16	1.44	0.51	35.42

3.5　親の学歴と教育意識の違いから見る学生生活

家庭環境の違いによるフラタニティやソロリティへの入会後の学生生活について，それぞれをG1からG4のグループに分けて分析した結果が表3である。表3では，各項目について，学生自身にとってどの程度思うかを「とてもそう思う」を1点，「ややそう思う」を2点，「あまりそう思わない」を3点，「全くそう思わない」を4点とし，項目ごとに平均値と変動係数を算出した。その後，各グループの学生生活についての類似点と相違点を検討した。

フラタニティやソロリティの活動理念である地域奉仕や社会貢献への参加度についての質問項目において，G1のフラタニティの平均値（平均値1.22, 変動変数36.07）とソロリティの平均値（平均値1.24, 変動変数37.90）では，他のグループに比べ，平均値が低く，週末に積極的に社会貢献活動に参加していることが示された。一方で，他のグループに比べ，G4のフラタニティの平均値（平均値1.67, 変動

変数29.94）がやや高かった。全米の大学に同じ組織の支部があるため，課外活動などを通じ，国内の学生同士が交流することもできる。以上のことから，フラタニティやソロリティの学生は，地域奉仕や社会貢献活動の一環としてチャリティイベント等の企画・開催を通じ，フラタニティやソロリティのそれぞれのメンバーが役割を持ち活動することにより，積極性や責任感を兼ね備えた人材へと成長することができるメリットがある。さらに，大学1年次の早い段階から社会貢献活動に積極的に参加することで，集団行動や上下関係などの社会性やリーダーシップの素養を身に付けることができる。

学業面では，親の学歴は低いが，親の教育意識が高い家庭で育ったフラタニティやソロリティそれぞれの約6割が授業の復習やテスト対策を協力し合って行う傾向が強いことが示された。学業成績の調査結果を見ると，G3のフラタニティとソロリティそれぞれの7割がGPA3.0以上3.5未満を取得している。親の学歴に関係なく，親の教育意識の高い家庭環境で育った学生の多くが，互いに協力し合い授業の予習や復習などを行ない，高い学業成績を維持していることが明らかになった。

本調査結果では，会員資格を維持するための会費を経済的な負担として考える学生は少なかった。G4のソロリティの学生の平均値（平均値2.0，変動係数36.50）がやや低い結果となり，他のグループの学生に比べ，会費が経済的な負担と考えている学生がやや多いことが示された。フラタニティやソロリティに入会後，各団体により会費額は異なるが，学生は各学期100ドルから1,000ドル程度の修繕積立金やイベント活動費等を含む会費を支払う。その他にフラタニティ・ハウスやソロリティ・ハウスに滞在し共同生活を送る場合，各学期2,600ドルから5,000ドル程度の家賃，各学期1,000ドルから2,000ドル程度の食費が別途かかる。毎日の膨大な量の授業の予習や復習に加え，フラタニティやソロリティとしての活動時間等を考えると，アルバイトができる時間も限られており，毎月の会費や家賃の納入が難しくなった場合に退会する学生もいることが推測できる。アメリカの授業料が高騰し続ける中，授業料や寮費以外の出費を抑えるために，フラタニティやソロリティの活動理念に関心を持つ学生でも入会を躊躇する学生が多数いることが考えられる。

また，先行研究では過度な飲酒の強要や違法なドラッグの使用などがフラタニティやソロリティに対する否定的な特徴として挙げられており，本調査の結果からも各グループの学生が一気飲みを強要された経験や違法ドラッグの使用を認めている。過度な飲酒の強要経験の有無に関する質問項目に対し，G2のフラタニティ（平均値2.0, 変動係数44.50）とG3のフラタニティ（平均値2.0, 変動係数33.50）のそれぞれの平均値が一番小さく，次にG1のフラタニティ(平均値2.02, 変動係数47.03)，G2のソロリティ（平均値2.09, 変動係数25.84）であった。一方で，G4のフラタニティとソロリティそれぞれの平均値が高く，飲酒の強要経験がある学生が少ないことが明らかになった。

フラタニティやソロリティのハウス内での違法なドラッグの使用の有無に関する質問項目では，G2のフラタニティのドラッグの使用率が一番高く（平均値1.89, 変動係数31.75），次にG1のフラタニティ（平均値2.13, 変動係数46.95），G3のフラタニティ（平均値2.40, 変動係数35.00）という結果が示された。ソロリティではG3のソロリティの平均値（平均値2.63, 変動係数42.59）が一番小さく，フラタニティに比べ，ドラッグの使用率は低いことが示された。飲酒の強要経験の有無と同様に，G4のグループのドラッグの使用率がソロリティでは特に低い結果が明らかになった。

フラタニティやソロリティに所属する学生は，飲酒の強要やドラッグの使用などのフラタニティやソロリティに対する否定的な特徴を理解し認めた上で，社会貢献活動や地域貢献という強い想いを持ち，将来のキャリアを見据えた人的ネットワーク拡大の構築を目標とし，お金では決して買うことのできない価値があり，入会を決めていることが伺える。

表３　フラタニティとしての学生生活

学生生活	Group 1							
	フラタニティ				ソロリティ			
	度数	平均値	標準偏差	変動係数	度数	平均値	標準偏差	変動係数
1. ボランティア活動やチャリティイベント等の地域奉仕や社会貢献活動に常に参加している	102	1.22	0.44	36.07	209	1.24	0.47	37.90
2. フラタニティやソロリティの仲間同士で共通の価値観や考えを互いに共有している	104	1.48	0.56	37.64	209	1.55	0.58	37.42
3. メンバー同士が講義の予習・復習やテスト勉強を協力し合っている	104	1.63	0.69	42.33	208	1.62	0.73	45.06
4. 会員資格を維持するためには経済的な負担がかかる	103	2.61	0.83	31.80	201	2.48	0.75	30.24
5. 過度にお酒を飲ませる一気飲みを強要されたことがある	103	2.02	0.95	47.03	2.3	2.13	1.04	48.83
6. ハウス内で違法なドラッグを使用したことがある	103	2.13	1.00	46.95	202	2.75	1.02	37.09
学生生活	Group 2							
	フラタニティ				ソロリティ			
	度数	平均値	標準偏差	変動係数	度数	平均値	標準偏差	変動係数
1. ボランティア活動やチャリティイベント等の地域奉仕や社会貢献活動に常に参加している	10	1.60	1.08	67.50	11	1.36	0.67	49.26
2. フラタニティやソロリティの仲間同士で共通の価値観や考えを互いに共有している	10	1.80	1.03	57.22	11	1.82	0.75	41.21
3. メンバー同士が講義の予習・復習やテスト勉強を協力し合っている	10	2.00	0.94	47.00	11	1.55	0.69	44.52
4. 会員資格を維持するためには経済的な負担がかかる	9	2.67	1.00	37.45	11	2.18	0.87	39.91
5. 過度にお酒を飲ませる一気飲みを強要されたことがある	9	2.00	0.89	44.50	11	2.09	0.54	25.84
6. ハウス内で違法なドラッグを使用したことがある	9	1.89	0.60	31.75	11	2.82	0.98	34.75

学生生活	Group 3							
	フラテニティ				ソロリティ			
	度数	平均値	標準偏差	変動係数	度数	平均値	標準偏差	変動係数
1. ボランティア活動やチャリティイベント等の地域奉仕や社会貢献活動に常に参加している	10	1.40	0.52	37.14	21	1.29	0.46	35.66
2. フラタニティやソロリティの仲間同士で共通の価値観や考えを互いに共有している	10	1.60	0.52	32.50	21	1.52	0.60	39.47
3. メンバー同士が講義の予習・復習やテスト勉強を協力し合っている	10	1.50	0.71	47.33	21	1.52	0.87	57.24
4. 会員資格を維持するためには経済的な負担がかかる	10	2.30	0.68	29.57	19	2.32	0.82	35.34
5. 過度にお酒を飲ませる一気飲みを強要されたことがある	10	2.00	0.67	33.50	19	2.16	1.12	51.85
6. ハウス内で違法なドラッグを使用したことがある	10	2.40	0.84	35.00	19	2.63	1.12	42.59

学生生活	Group 4							
	フラタニティ				ソロリティ			
	度数	平均値	標準偏差	変動係数	度数	平均値	標準偏差	変動係数
1. ボランティア活動やチャリティイベント等の地域奉仕や社会貢献活動に常に参加している	9	1.67	0.50	29.94	16	1.56	0.73	46.79
2. フラタニティやソロリティの仲間同士で共通の価値観や考えを互いに共有している	9	1.67	0.50	29.94	15	1.80	0.68	37.78
3. メンバー同士が講義の予習・復習やテスト勉強を協力し合っている	9	1.78	0.97	54.49	14	2.50	0.76	30.40
4. 会員資格を維持するためには経済的な負担がかかる	9	2.67	0.87	32.58	16	2.0	0.73	36.50
5. 過度にお酒を飲ませる一気飲みを強要されたことがある	9	2.78	1.09	39.21	15	3.00	1.00	33.33
6. ハウス内で違法なドラッグを使用したことがある	9	2.67	1.00	37.45	15	3.00	1.00	33.33

4　考察

本調査を通じ，フラタニティやソロリティの学生は，それぞれの家庭環境に関係なく，活動理念である社会貢献や地域奉仕等の活動に賛同し，将来のキャリアを意識した人的ネットワークの構築や共同生活や様々な活動を通じ互いに強い絆で結ばれた友人関係を築くことを目的に入会している学生が多いことが示された。一方で，先行研究によると，フラタニティやソロリティの学生は，授業以外で

フラタニティやソロリティに所属していない学生との交流の機会が少ない傾向にあるという調査結果がある（Antonio, 2001; Milem, 1994; Pascarella, Edison, Nora, Hagedorn, & Terenzini, 1996; Wood & Chesser, 1994）。大学卒業後，様々なバックグランドを持つ人々との交流の中でリーダーシップを発揮するためにも，在学期間中にフラタニティやソロリティに所属していない学生との交流の促進も必要である。

また，フラタニティやソロリティに所属する学生と所属していない学生の学業成績については，今後，フラタニティやソロリティに所属していない学生も対象に調査を行ない，比較分析を行なう必要がある。フラタニティやソロリティの中には，メンバーが履修した数十年分の教科書，授業ノート，中間・期末試験の答案等が全て保存されているテスト・バンク（Test Bank）が存在し，試験対策の際に役立てることができるメリットがある。Jain & Kapoor（2015）によると，学業成績が低い学生が学業成績の高いクラスメイトや学生寮のルームメイトと共に復習や試験対策を行なうことで，結果的に，学習意欲に影響を与え，高い学業成績を修める可能性がより高くなることが示された。フラタニティやソロリティに所属の有無に関係なく，友人同士の協力や学生自身の学業に対する姿勢次第で成績が決まることわかる。一方で，学部生の13%がフラタニティやソロリティに所属するカリフォルニア大学ロサンゼルス校（University of California, Los Angeles）の学内調査では，フラタニティやソロリティに所属していない学生よりもフラタニティやソロリティの学生のGPAの平均が高いことが示された（UCLA Office of Fraternity and Sorority Life, 2018）。アメリカでは，大学時代の学業成績は，就職採用審査の際に非常に重要な審査項目の一つになっているため，フラタニティとソロリティに所属していない学生同様に，フラタニティやソロリティの学生は常に高い成績を維持し，就職活動の際に有利に働くように取り組んでいる。本調査の分析結果から，フラタニティやソロリティのメリットの一つでもある共同生活を通じ，互いに協力し合いながら授業の予習や復習を行なうことについても，親の教育意識が低い家庭環境で育った学生になるにつれて，そのメリットが十分に活かされていない傾向がある。さらに，親の学歴や親の教育意識が低くなるにつれて，フラタニティやソロリティとしての本来の活動理念がやや薄れていることが明らかになった。親の学歴や家庭環境の違いにより，フラタニティやソロリティに所属するメリットをどのように活かすのかが異なり，また，大学在籍中の学生の勉学や課外活動に対する意識が，親の教育意識や学歴が低くなるにつれて異なることが示された。

本調査を通じ，先行研究で多くの研究者が指摘する過度な飲酒の強要やドラッグの使用等の否定的な特徴を踏まえた上で，社会貢献や人的ネットワークの拡大を目的として入会していることが示された。親の学歴が低く，親の教育意識も低いG4グループに比べ，親の学歴は高いが，親の教育意識は低いG2グループのフラタニティや，親の学歴は高く，親の教育意識も高いG1グループのフラタニティのドラッグ使用率が高いことが示されたため，今後，学生のドラッグの使用率と親の教育意識や学歴との関係についても社会階層や保護者の教育意識の観点から調査する必要がある。

5　今後の課題

本調査では，親の教育意識が高く，親が大学卒業以上の学歴を持つ学生が大半を占めていたため，SESで分類できた場合，SESの高い層や中間層の学生が多数を占めることが推測できる。昔のフラタニティは，アメリカのエリートを輩出する場であり，一部の裕福層のキリスト教徒の白人学生のみが所属する学生組織であった（Konnikova, 2014）。本調査では，親の学歴が低く，親の教育意識も低い家庭環境で育った学生になるにつれて，仲間同士で価値観や考え方を互いに共有する意識が薄れていることが伺える。今後の調査では，奨学金受給の有無，親の学歴や職業，所得などをアンケート調査の質問項目に含め，家庭のSESの違いから見るフラタニティやソロリティへの入会動機や将来のキャリアに対する意識の違いについて調査する。その理由については，インタビュー調査などを実施し，さらに深く分析する必要がある。

本調査では，西海岸の学生を対象とした調査となったが，今後は，東海岸にあるアイビーリーグ等の名門私立大学に在籍するフラタニティやソロリティの学生の入会動機やキャリアに対する意識も異なる可能性があるため，西海岸と北東部のフラタニティやソロリティの地域別比較調査を実施する。また，SES別によるフラタニティやソロリティに入会していない学生を対象に，なぜ入会しなかったのかなどの理由を含めた比較調査を行なう予定である。SESの高い層や中間層の中で，特に裕福層の学生のみがこのような学生組織に参加し，大学卒業後は政府機関や大手企業に就職し，学生時代に培ったリーダーシップを発揮して活躍していることが推測される。裕福層の子供は子供の世代も裕福層になり，貧困層の子供は子供の世代も貧困層になるという文化的再生産のサイクルがアメリカ社会の中で長年受け継がれている点についてSESの観点から調査する。

また，SESの低い層の学生がフラタニティやソロリティに所属し，様々な分野での人脈を形成することにより，貧困層の子供は子供の世代も貧困層になるという貧困の悪循環から抜け出すことができる起爆剤としての役割をフラタニティやソロリティが担う可能性がある。SESの低い層の学生がフラタニティやソロリティに入会した場合，学年が上がるにつれて，その学生に対しフラタニティやソロリティとしての活動が果たす役割についての調査も今後の課題としたい。日本社会で考えた場合，幼少期からの家庭環境が，社会奉仕活動への高い関心やグローバルリーダーの育成に強い影響を与えるのであれば，大学教育からではなく，小学校や中学校の早い段階から，主体的に何らかのアクションを自分で起こし，社会で自分がどのように活躍できるかを考える授業を始めることが必要不可欠であると考える。

フラタニティとソロリティは，大学の授業では学ぶことができない社会人としての人間関係やリーダーシップ力を学ぶ場を提供し，キャリア教育としても画期的な役割を果たしていると推測できる。しかし，多くのメリットが考えられる一方で，多くの学生がフラタニティやソロリティへの入会を希望しない理由についても調査する必要がある。

多くのグローバルリーダーを輩出し，リーダーシップ力の養成などで高い効果を上げている学生組織

である。米国の大学において，社会貢献に対する高い意識を持つ学生やリーダーシップを兼ね備えた学生に対し具体的にどのように意識を高めて育成しているのかを調査する必要がある。Martin, Hevel, & Pascarella（2012）によれば，社会的に責任のあるリーダーシップ力を持つ人材を育成する場がフラタニティやソロリティであり，フラタニティやソロリティに所属していない学生のリーダーシップ力の養成を考える上で，教育者はフラタニティやソロリティの日々の取り組みを参考にすべきであると提言する。社会貢献活動の一環としてチャリティイベント等の企画・開催を学年関係なく学生主体で行う機会を頻繁に提供することにより学生の意識が変わることが示された。フラタニティやソロリティの活動をさらに多角的な視点から調査することで，世界を舞台に活躍することができるグローバルリーダーを育成するための教育プログラムの開発を急務とする日本の多くの大学にとっては，今後応用できる点があると考える。

引用文献

1) Amaki, Y. (2013). Postsecondary Educational Decision-among First-Generation College-Bound Students in Okinawa Prefecture. *Asian Pacific Journal of Educational Development*, 2 (2), pp. 23-37.
2) Anderson, E.C. (1985). Force Influencing Student Persistence and Achievement. In L. Noel, R.S. Levitz, & D. Saluria (ed.), *Increasing Student Retention*, San Francisco: Jossey-Bass, pp.44-61.
3) Antonio, A. (2001). Diversity and the IAmakinfluence of Friendship Groups in College. *Review of Higher Education*, 25, pp.63-89.
4) Asel, A., Seifert, T. & Pascarella, E. (2009). The effects of Fraternity/Sorority Membership on College Experiences and Outcomes: A Portrait of Complexity. *The Research Journal of the Association of Fraternity/Sorority Advisors*. Vol.4, No.2, pp.1-15.
5) Berger, N. & Archer, J. (2016). School socio-economic status and student socio-academic achievement goals in upper secondary contexts. *Social Psychology of Education*. 19 (1). pp. 175-194.
6) Birkenbolz, R.J., & Schumacher, L.G. (1994), Leadership skills of college of agriculture graduates. *Journal of Agricultural education*, 35 (1), pp.1-8.
7) Bourdieu, P. & Passeron, C.J. (1994). *Reproduction in Education, Society and Culture*, (R. Nice, Trans.). London: Sage Publications.
8) Capone, C., Wood, M.D., Borsai, B., & Laird, R.D. (2007). Fraternity and Sorority Involvement, Social Influences, and Alcohol Use among College Students: A Prospective Examination. *Psychology of Addictive Behaviors*, 21(3), 316-327.
9) Dwyer D. & Hecht, J. (1992). Minimal Parental Involvement. *The School Community Journal*, 2 (2), pp.275-289.
10) Harms, P., Woods, D., Roberts, B., Bureau, D., & Green, A. (2006), Perceptions of Leadership in Undergraduate Fraternal Organizations. *The Research Journal of the Association of Fraternity Advisors*. 2 (2), pp.81-94.
11) Hayek, J., Carini, R., O'Day, P., & Kuh, G. (2002). Triumph or Tragedy: Comparing Student Engagement Levels of Members of Greek-letter Organizations and Other Students. *Journal of College Student Development*, 43, pp.643-663.
12) Hevel, M.S., Martin, G.L., Weeden, D.D., & Pascarella, E. (2015). The Effects of Fraternity and Sorority Membership in the Fourth Year of College: A Detrimental or Value-Added Component of Undergraduate Education? *Journal of College Student Development*, 56 (5), pp.456-470.
13) Jain, T. & M. Kapoor (2015). The Impact of Study Groups and Roommates on Academic Performance,

Review of Economic and Statistics, 1 (97), pp.44-54.

14) Konnikova, Maria (2014). 18 U.S. Presidents Were in College Fraternities: Do fats create future leaders, or simply attract them? *The Atlantic*. Feb 21, 2014 https://www.theatlantic.com/education/archive/2014/02/18-us-presidents-were-in-college-fraternities/283997/（参照日：2017年9月1日）

15) Levine, G. N. & Sussmann, L.A. (1960). Social Class and Sociability in Fraternity Pledging. *American Journal of Sociology*, 65 (4), pp.391-399.

16) Martin, G., Hevel, M., & Pascarella, E. (2012) Do Fraternities and Sororities Enhance Socially Responsible Leadership? *Journal of Student Affairs Research and Practice*, 49 (3), pp.267-284.

17) Milem, J. (1994). College, Students, and Racial Understanding. *Thought & Action*, 9, pp.51-92.

18) National Center for Educational Statistics (2016). Postsecondary Education. *The Condition of Education 2016*, NCES, IES, U.S. Department of Education. pp.212-262.

19) Nelson, S.M., Halperin, S., Wasserman, T.H., Smith, C., & Graham, P. (2006). Effects of Fraternity/Sorority Membership and Recruitment Semester on GPA and Retention. *The Research Journal of the Association of Fraternity Advisors*, 2 (1), pp.61-73.

20) Pascarella, E.T., Edison, M., Nora, A., Hagedorn, L., Terenzini, P. (1996).Influences on Students' Openness to Diversity and Challenge in the First Year of College. *Journal of Higher Education*, 67, pp.174-195.

21) Pennington, D.C., Zvonkovic, A.M., & Wilson, S.L. (1989). Changes in College Satisfaction across an Academic Term. *Journal of College Student Development*, 30, pp. 528-535.

22) Sirin, S. (2005). Socioeconomic Status and Academic Achievement: A Meta-Analytic Review of Research. *Review of Educational Research*, 75 (3), pp.417-453.

23) University of California, Los Angeles Office of Fraternity and Sorority Life http://www.greeklife.ucla.edu/（参照日：2018年9月1日）

24) Wechsler, H., Kuh, G., & Davenport, A. (1996). Fraternities, sororities, and binge drinking: Results from a national study of American colleges." *NASPA Journal*, 33, pp.260-279.

25) Wechsler, H. (1996). Alcohol and the American College Campus: A Report from the Harvard School of Public Health. *Change*, 28, pp.20-25.

26) Whipple, E. G., & Sullivan, E.G. (1998). Greek Letter Organizations: Communities of Learners? *New Directions for Student Services*, 81, pp.7-17.

27) Wechsler, H., Dowdall, G., Maenner, G., Gledhill-Hoyt, J., & Lee, H. (1998). Changes in Binge Drinking and Related Problems among American College Students between 1993 and 1997: Results of Harvard School of public Health College Alcohol Study. *Journal of American College Health*, 47, pp.57-68.

28) Wood, P., & Chesser, M. (1994). Black Stereotyping in a University Population. *Sociological Focus*, 27, pp.17-34.

29) 浜野隆（2009）家庭での環境・生活と子どもの学力．教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書. Benesse 教育開発センター研究所報 52, pp.64-75.

30) 文部科学省委託研究「平成25年度全国学力・学修状況（きめ細かい調査）の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/098/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2015/02/24/1354574_01.pdf（参照日：2017年2月1日）